



健康と競技の心理

Psychology of Health & Sport

◇ 特集 日本スポーツ心理学会第 45 回大会に参加して	1
◇ 特集 九州スポーツ心理学会第 31 回大会 報告	2
◇ 「こころトピック」	5
◇ 連載 「みなさん！読んでみてください」	6
◇ 連載 研究タマゴ	7
◇ お知らせ	
九州スポーツ心理学会からのお知らせ	8
九州スポーツ心理学会役員・事務局スタッフ	11
編集後記	12

特 集

日本スポーツ心理学会第 45 回大会に参加して

日本スポーツ心理学会第 45 回大会

2018 年 10 月 12 日 (金) ~10 月 14 日 (日) 名古屋国際会議場

『6 回目の日本スポーツ心理学会』

水崎 佑毅 (福岡大学スポーツ科学部)

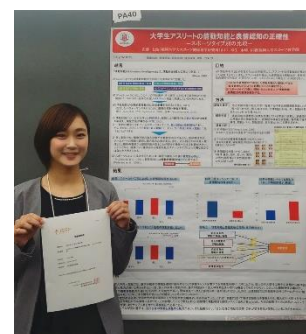
今から 7 年前、金沢で開催された第 39 回大会 (2012 年 11 月 24 日~25 日) が、私が初めて参加した日本スポーツ心理学会です。当時、鹿屋体育大学大学院の M1 (修士 1 年) だった私は、日本スポーツ心理学会に参加するのも初めて、金沢に行くのも初めて、新幹線に乗るのも初めて (宮崎出身の田舎モノなので…)、初めて尽くしで、訳も分からず興奮していたのを覚えています。さらに、学会会場では、研究を伝える先生方の熱意に圧倒され、「研究者の卵」と呼ばれる修士に進んだことを少し後悔したのが、今となっては良い思い出です。発表はありませんでしたが、D1 (博士 1 年) の U 先輩のポスターの前で自分のポスターのように写真を撮らせていただき、私の初めての日本スポーツ心理学会は終了しました。ちなみに、私の初めての学会発表は九州スポーツ心理学会第 26 回大会 (開催場所は、なんと！福岡大学でした) のポスター発表です (写真)。

あれから 7 年、第 45 回大会 (2018 年 10 月 12 日~14 日) に参加させていただき、これで 6 回目の学会参加となりました。今年の学会は名古屋で開催され、大会企画シンポジウムと学会企画シンポジウムを合わせた演題数が 143 演題ということもあって、とても勉強しがいのある学会となっております。特に、大会企画シンポジウムの「日本卓球復活の道」



は、聞き応えのあるシンポジウムでした。「復活の道」というタイトル通り、宮崎義人強化本部長の話す言葉一つ一つに、絶対復活させるという「覚悟」を感じることができ、聞いている私の胸も熱くなりました。また、ラウンドテーブル・ディスカッションの「視線行動とスポーツパフォーマンス」では、アプローチの仕方や研究方法などで勉強になることが多く、考え方の幅を広げることができました。6 回目の日本スポーツ心理学会でも、筆頭での発表はありませんでしたが、研究室の安部 (修士 2 年) が「大学アスリートの情動知能と表情認知の正確性」についてポスター発表をしてくれました (写真)。

執筆して思いましたが、日本スポーツ心理学会でもっと積極的に研究発表をしようと思います。大学教員として、まだまだ未熟ではありますが、頑張りを続けることだけは唯一褒めて頂ける長所なので、これからも頑張りを続けて精進していきたいと思っています。



特 集

九州スポーツ心理学会第 31 回大会 報告

九州スポーツ心理学会第 31 回大会が下記において開催されました。

日時：平成 30 年 3 月 3 日（土）4 日（日）

会場：佐賀大学 本庄キャンパス 教養教育大講義室（佐賀市本庄町 1）

大会テーマ：

『スポーツ心理学研究の現在（いま）—理論と現場をつなぐ—』

特別企画

テーマ：指導者としてメンタルトレーニングを学ぶ意義 —現場での活用法—

演者：志水貢一（肥後銀行駅伝部監督・大阪学院大学陸上競技部コーチ）

司会：荒井久仁子（医療法人社団寿量会熊本機能病院）

特別企画

フリースタイル・グループ・ディスカッション

テーマ：スポーツ心理学研究の現在（いま）—理論と現場をつなぐ—

代表モデレーターとセッションテーマ

①質的研究ことはじめ：

内田若希（九州大学）

松田晃二郎（九州大学大学院）

②学校体育の有効性を示す研究デザイン：

山津幸司（佐賀大学）

須崎康臣（九州大学大学院）

③チームのメンタルトレーニング：

奥野真由（久留米大学）

下園博信（福岡大学）

④運動学習と実践現場をつなぐ：

中本浩輝（鹿屋体育大学）

総合司会：山口幸生（福岡大学）

招待講演

テーマ：スポーツと体育：ダイバーシティー質的心理研究から学んだこと

講師：佐藤貴弘 Takahiro Sato (Kent State University)

司会：山津幸司（佐賀大学）

特別講演

テーマ：データ解析手法のスポーツ心理学への適用

—ベイズ統計と可視化からのアプローチ—

講師：堀尾恵一（九州工業大学大学院生命体工学研究科）

指定討論：夏目季代久（九州工業大学大学院生命体工学研究科）

司会：磯貝浩久（九州工業大学）

ポスター発表

九州スポーツ心理学会第 31 回大会 報告

『九州スポーツ心理学会第 31 回大会を振りかえって』

参加学会：九州スポーツ心理学会 31 回大会
日時・開催地：2018 年 3 月 4 日 佐賀大学 本庄キャンパス（佐賀市）

杉山 佳生（九州大学）

3年に一度、大会を福岡以外で開催しようという学会の方針に従い、第31回大会は、佐賀大学での開催となりました。理事の山津幸司先生（佐賀大学）のお力添えもあって、この大会は、場所だけでなく、内容としても、大変「新奇性のある」ものとなりました。

「スポーツ心理学研究の現在（いま）－理論と現場をつなぐ－」という大会テーマのもと、2つの講演（招待講演，特別講演）と2つの特別企画が実施されました。招待講演では、米国の Kent State University で教鞭を執っておられる佐藤貴弘先生から、質的研究およびダイバーシティ研究の最前線について、ご紹介いただきました。また、特別講演では、九州工業大学大学院生命体工学研究科の堀尾恵一先生と夏目季代久先生をお招きし、ベイズ統計とデータの可視化の方法を、スポーツ心理学領域での応用実践例を題材に、解説していただきました。いずれの講演も、全国レベルの学会で行われてもおかしくないものであり、大変有意義な時間を過ごすことができました。

特別企画も、魅力的なものでした。1つ目の特別企画では、大会開催の前年に急逝された岩崎健一先生（熊本大学名誉教授）の追悼の意味も含めて、岩崎先生の教え子らから、メンタルトレーニングの実践報告をしていただきました。もう1つの特別企画は、数年間継続して行われているフリースタイル・グループディスカッション (FSGD) でしたが、今回は、各セクションの担当を2名（モデレーターと討論者）としたり、「事前必読文献」を提示したり、事後に報告書を作成（学会 HP に掲載）したりと、企画の「実効性」をいっそう高めるための方策が取り入れられました。

このように、多くの新しい試みがなされた第31回大会でしたが、学会の更なる充実を求めて、また、会員の要望もあって、第32回大会では、「研究室紹介」という新企画を行うことになりました。これは、FSGD の発展形として位置づけられ、いくつかの大学の研究室、あるいは、そこで行われている研究を「話のタネ」として、自由に討議してもらおうというものです。参加者の皆様に、お楽しみいただければ、喜ばしい限りです。

第 31 回九州スポーツ心理学会 報告

『九州スポーツ心理学会第 31 回大会を振り返って』

参加学会：九州スポーツ心理学会 31 回大会
日時・開催地：2018 年 3 月 4 日 佐賀大学 本庄キャンパス (佐賀市)

山津 幸司 (佐賀大学教育学部)

31 回目の学術大会は佐賀大学本庄キャンパスにて開催されていただきました。今回の大会テーマは「スポーツ心理学研究の現在 (いま) - 理論と現場をつなぐ -」でした。佐賀県は九州スポーツ心理学会会員が 2 名程と極めて少ない地域です。佐賀県の体育関係者に本学会の魅力を伝える機会になればと願ってお引き受けいたしました。

初日は前半の特別企画にて志水貢一先生 (肥後銀行駅伝部監督) によるスポーツ・メンタルトレーニングの実践に関する講演、後半はフリースタイル・グループ・ディスカッションによる積極的な討論が行われました。二日目には、佐藤貴弘先生 (ケント州立大学) による質的研究手法に関する招待講演、堀尾恵一先生 (九州工業大学) によるベイズ統計の特別講演、午後からは 30 演題のポスター発表と盛りだくさんの企画を提供することができました。

九州スポーツ心理学会のおかれた状況は、少子化や国立教員養成学部の再編により厳しくなる可能性もあると思いますが、一方で私立のスポーツ系学科の新設は新たな会員を掘り起こせる契機になりえます。本学会が九州内外でスポーツ心理学の魅力を発信できる場として発展することを祈ります。

最後になりますが、2 日間の大会を完遂できたのは、磯貝浩久会長 (九州産業大学)、事務局の伊藤友記先生 (九州共立大学)、兄井彰先生 (福岡教育大学) の精力的なサポートのおかげであります。また、前日のスポーツ・メンタルトレーニングフォーラムでも山崎将幸先生 (東亜大学)、上野雄己さん (日本学術振興会特別研究員 PD) に受付等のご協力をいただきました。この場をかりて、学会遂行にてサポートいただきました全ての学会関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

連載

こころトピック

第 6 回 『サーバント・リーダーシップというあり方』

伊藤 友記（九州共立大学）

このところ、競技に限らず様々な場面で組織のあり方、とりわけ指導者のあり方が問われている。組織運営において指導者の存在は欠かせないであろうし、そこで発揮されるリーダーシップ如何によって組織のパフォーマンスは左右される。言葉のイメージからすると、リーダーシップとは、指導者に含まれる「指導」という言葉のニュアンスとも関わって、強い意思のもと、リーダー自身の考え方や価値観を貫き、選手を強い統率力で引っ張っていくイメージがあるだろう。このような姿の対極ともいえる指導者の在り方として、サーバント・リーダーシップという考えがある。この理念は、アメリカのロバート・K・グリーンリーフによって提唱されたリーダーシップ哲学で、「上に立つ人こそ、みんなに尽くしていくタイプの人でなければいけない」という考え方に基づいている。サーバントという言葉は、「従者」「召使い」の意味であり、普通に考えれば「指導者」としてのリーダーとは反対の立場のように思われる。しかし、彼の理念に示されるように、サーバントとは相手に「奉仕する人」であり「尽くす人」と捉えれば、リーダーがフォロワーに対して尽くすこと、心を込めて支援することは極めて望ましい組織運営のあり方ではないか。リーダー自身が達成すべきビジョンや夢に対して強い使命感を持ち、それを実現するために自らの意思でサーバントに徹するのである。彼はまた、「サーバント・リーダーシップは、最初は尽くしたいという自然な感情から始まる。その後、意識的に選択したうえで、導いても行きたいという気持ちになっていく」と述べている。この「尽くしたいという自然な気持ち」と「導いてもいきたいという気持ち」が出てくる状況は、親が自分の子どもに接する状況を考えれば理解できやすいだろう。子どもに求める親なりの考えやビジョンやミッションがあり、それに合った方向に子どもが向かうのであれば、後ろから精いっぱい支えてあげたいという思いである。このタイプのリーダーは目指してリーダーになるのではなく、みんなのことを思ってミッションと夢をもって、それを実現するために周囲の人々に尽くすことにより、結果としてリーダーになっていくのがポイントだそうである。このような指導者が増えれば、真の意味での「アスリート・ファースト」が実現するに違いない。

【参考】：池田守男・金井壽宏（2007）「サーバントリーダーシップ入門」かんき出版

連 載

最近読んだ面白い研究または書籍を先生方にご紹介していただきます。

「みなさん！読んでみてください」

『スポーツ産業学研究』

日本スポーツ産業学会編

磯貝浩久（九州産業大学）

皆さんにお薦めできる本を最近は読んでいないので、学会誌になりますが、私が編集委員を務める『スポーツ産業学研究』を紹介します。

日本スポーツ産業学会は 1990 年に発足しましたが、良く知らない方も多いため、簡単に紹介したいと思います。学会の HP に次の 3 つのアピールポイント、「1. 日本スポーツ産業学会は最先端を走ります」「2. 日本スポーツ産業学会は異種交流を歓迎します」「3. 日本スポーツ産業学会は癒される広場を目指します」があげられています。これらは学会の特徴を良く現していると思います。特に 2 の異種交流ですが、会長はアシックスの尾山基 CEO と早稲田大学の平田竹男先生の 2 名が勤められています。会員には、研究者とスポーツ用品製造業、プロスポーツ、広告代理店、スポーツメディア、スポーツ健康産業、余暇産業、等々、様々な業種の方がおられ、研究者も、経営学、法学、工学、教育学、医学、社会学等、さまざまな分野の方がおられます。

『スポーツ産業学研究』は、日本スポーツ産業学会が毎年（現在は年 4 回）発刊している学術雑誌で、1991 年から 2019 年 3 月までの間に、29 巻が発刊され 524 編の論文が掲載されています。スポーツマネジメントやスポーツ社会学等の分野の研究が多いのですが、近年はスポーツ心理学の研究が数多く掲載されています。その中の幾つかをご紹介します。

まず、鹿屋体育大学の萩原悟一先生は、2014 年に「スポーツにおける個人・社会志向性と競技者アイデンティティの関連を基軸としたスポーツ・コミットメントモデルの検討（萩原・磯貝）」が原著で掲載され、学会賞（奨励賞）を受賞されています。その他、九州スポーツ心理学会に関係の深い先生の論文（神力亮太ほか（2016）サッカー指導者の効果的なリーダーシップ行動の検討；中須賀巧，阪田俊輔，田中輝海（2018）大学運動部の動機づけ雰囲気，個人・社会志向性，部活動適応感の関係；高橋正則，磯貝浩久，Judy L. Van Raalte（2018）予測反応事態の眼球運動からマイクロサッカードを検出する試み）が掲載されています。また、皆さんの知っている先生の論文（ウルヴェ京ほか（2018），渋谷崇行（2018），荒井弘和ほか（2018），水落文夫ほか（2018））も今年度掲載されました。

『スポーツ産業学研究』にスポーツ心理学に関する論文の投稿・掲載が増加している背景には、「スポーツ心理学研究」が狭き門になっていることや、スポーツマネジメントなどに比べてスポーツ心理学の方法論がしっかりしていることがあるように感じています。

興味のある方は、日本スポーツ産業学会の HP から論文が閲覧できますので、是非ご覧ください。そして、論文投稿にもチャレンジしてみてください！

連載

新たなステージを求め、研究の第 1 歩を踏み出した方々をリレー形式でご紹介！

「研究タマゴ」

相羽 枝莉子（九州大学大学院）

安部 七波（福岡大学大学院）

みなさんこんにちは、福岡大学大学院の安部です。私は学部の 3 年生から山口幸生先生（福岡大）のスポーツ心理学ゼミに所属し、卒業論文から修士論文にかけて、「スポーツ選手の“情動知能”」をテーマに研究を行っております。現在スポーツ心理学を専攻している私ですが、実は学部 1 年生の時に必修だった山本勝昭先生のスポーツ心理学の単位を落とし、3 年生で山口先生・下園先生（福岡大）のスポーツ心理学を再履修しました……。また、情動知能を研究しているにもかかわらず私自身よく周りの人に「情動知能の研究をしているくせに全く自分の情動をコントロールできていないぞ!」と言われるほど、自己の情動を扱うのが苦手です（笑）。今後、情動知能を高める方法を探っていくことは、私の研究、そして人生においても大きな課題の一つとなると考えております。

私が大学院進学を志したきっかけは、3 年時のスポーツ心理学実験実習という授業でした。学生自身が研究のテーマを決め、実験の考案・実施を行い、結果をまとめて発表するという内容でしたが、この授業を通して実験や研究の面白さを知りました。そして当時、非常勤講師で来られていた磯貝先生（九州産業大）から、「安部さん大学院いかないの？ 研究向いていると思うよ」と声をかけていただいたことで、大学院への進学が視野に入りました。

そんな私は、小学 1 年生からバスケットボールをしていて、しばしば、どのようにモチベーションを維持していくかなど、自分の心の問題に悩んでいました。大学 4 年生の時、学生コーチとして指導をする機会を得た際、知識のなさを痛感し、指導者たるもの選手の心理を理解することなしに良いコーチングはできない！ もっと勉強しなければならない！ と大学院進学を決めました。

いざ進学してみると、私の大学院 2 年間はとても充実したものでした。あっという間に 2 年が経ち、正直なところ、まだまだやり残したことも山ほどあります。それでも、私の大学院生活はすごく恵まれていたと感じます。学部時代から 4 年間ご指導頂いている山口先生をはじめ、下園先生、水崎先生（福岡大）など大勢の先生方から日々勉強させて頂きました。福岡大学では、他分野の先生方とも関わる機会が多く、授業外でも様々な経験ができます。先生方とテニスや卓球、フットサルをしたり、イカ釣りに連れて行って頂いたり、パブリックビューイングでサッカー観戦をしたりなど、交流が盛んでとても楽しいです。私の大学院生活は出会いと繋がりの大切さを実感した研究者への道のり第一歩目でした。まだまだ未熟者で力不足を痛感する毎日ですが、それが楽しくもあります。これからも多くのこと学ぶことができると思うとわくわくします。みなさん、今後とも何卒ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

大石彩加（九州大学大学院）

萩原悟一（九州工業大学大学院）
松田陽二（福岡大学大学院）

*執筆者の所属は、執筆当時のものです。ご了承ください。

古門 良亮（九州工業大学大学院）

守田 有希（福岡大学大学院）

佐久間智央（九州工業大学大学院）

学会からのお知らせ

《 九州スポーツ心理学会の紹介 》

沿 革

本学会は、第 1 回が昭和 63 年 3 月に開催され、九州スポーツ心理学研究会として発足しました。第 6 回大会（平成 5 年）より九州スポーツ心理学会と改称し、学会としての組織化が行われています。

目 的

本学会は、運動・スポーツ心理学における研究と介入を促進することを目的としています。事業として、運動・スポーツに関する心理学的研究とその応用に関心ある人々のために年 1 回の学会大会を開催し、情報交換および交流の場を提供しています。

会員のメリット

1. 健康・スポーツ心理学に関するさまざまな情報が得られます。
2. 年 1 回の学会大会の案内が送付されます。
3. 「九州スポーツ心理学研究」が送付されます。
4. 健康運動指導士の公衆ポイントが得られます。
5. 日本スポーツ心理学会「資格認定スポーツメンタルトレーニング指導士」の研修ポイントが得られます。

《 学会入会希望の方へ 》

入会をご希望の方は下記の項目を記入の上、事務局まで郵送または E-mail にてご連絡ください。

1. 氏 名
2. 所属機関
3. 連絡先（勤務先・自宅）
4. 電話番号（勤務先・自宅）
5. FAX 番号（勤務先・自宅）
6. E-mail

連絡先 〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町 1 番地

鹿屋体育大学 体育学部 体育・スポーツ心理学研究室

九州スポーツ心理学会事務局 宛

E-mail : nakamoto@nifs-k.ac.jp （中本浩輝）

ikudome@nifs-k.ac.jp （幾留沙智）

九州スポーツ心理学会 第 32 回大会開催!

大会テーマ「子どもの運動指導の再考」

平成 31 年 3 月 9 日・10 日 天文館ビジョンホール

【日時】 1 日目：平成 31 年 3 月 9 日（土） 受付 13：00～
2 日目：平成 31 年 3 月 10 日（日） 受付 8：30～

【会場】 天文館ビジョンホール 6F ホール
〒892-0842 鹿児島市東千石町 13 番 3 号

【参加費】 会員¥3,000 当日会員及び学生会員¥2,000

【3 月 9 日（土）】

12：00～13：00 理事会（天文館ビジョンホール 5F）

13：00～ 受付（天文館ビジョンホール 6F）

14：00～14：10 会長挨拶 森司朗（鹿屋体育大学）

14：10～15：40 大会企画特別講演

テーマ：発達の特徴に応じた幼児期の運動指導

演者：杉原隆（東京学芸大学名誉教授・田中教育研究所所長）

司会：森司朗（鹿屋体育大学）

15：40～16：00 休憩

16：00～17：30 大会企画シンポジウム

テーマ：部活時間短縮は問題か？

～学習効率の視点から考える～

学校教育行政の立場から

部活動時間短縮に対する鹿児島県の取組み

演者：桑山靖幸（鹿児島教育委員会・学校体育安全係）

指導者の立場から

実践者の立場から見た部活動時間短縮

演者：安達和紀（ソフトテニス全日本 U-14 女子チーム監督）

研究者の立場から

運動学習理論からみた学習効率

演者：兄井彰（福岡教育大学）

司会：中本浩揮（鹿屋体育大学）

- 17:30~17:40 休憩
 17:40~18:10 総会
 18:30~20:30 情報交換会

【3月10日(日)】

- 8:30~9:00 受付
 9:00~10:30 学会企画研究・研究室紹介
 10:30~10:50 休憩・ポスター掲示
 10:50~12:10 ポスター発表
 12:10~13:20 昼食・ポスター撤去
 14:40~11:40 学会企画特別対談

テーマ：指導におけるリーダーシップスタイル
 ：サーバントリーダーシップ

対談者：伊藤友記（九州共立大学）
 ：藤井雅文（鹿屋体育大学硬式野球部監督）

【会場案内】天文館ビジョンホール

JR 鹿兒島中央駅より

- ・鹿兒島市電、市バスで約 7 分、天文館停留所を降りて 1 分
- ・またはタクシーで約 7 分



P ※有料駐車場

九州スポーツ心理学会役員・事務局スタッフ

(平成 30 年 4 月～平成 33 年 3 月)

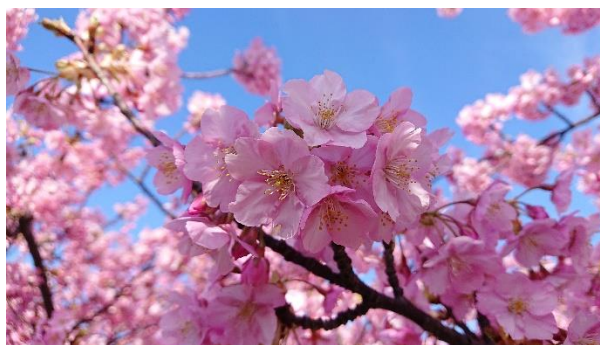
会長	森 司朗	鹿屋体育大学
副会長	兄井 彰	福岡教育大学
理事長	中本 浩揮	鹿屋体育大学
顧問 (前会長) :	徳永 幹雄	九州大学名誉教授
	佐久本 稔	福岡女子大学名誉教授
	山本 勝昭	福岡大学名誉教授
	橋本 公雄	熊本学園大学
理事 :	磯貝 浩久	九州産業大学
	杉山 佳生	九州大学
	伊藤 友記	九州共立大学
	荒井 久仁子	熊本健康・体力づくりセンター
	山内 正毅	長崎大学
	和多野 大	沖縄工業高等専門学校
	山津 幸司	佐賀大学
	下園 博信	福岡大学
	内田 若希	九州大学
	萩原 悟一	鹿屋体育大学
広報担当理事	今村 律子	福岡大学
会計担当理事	幾留 沙智	鹿屋体育大学
監事	荒井 久仁子	熊本健康・体力づくりセンター
	水崎 佑毅	福岡大学
事務局スタッフ		
総括	中本 浩揮	鹿屋体育大学
会計	幾留 沙智	鹿屋体育大学
編集	萩原 悟一	鹿屋体育大学
各種委員会委員		
企画委員会	森司朗 磯貝浩久 兄井彰 杉山佳生 伊藤友記 中本浩樹 内田若希	
広報委員会	今村律子 山崎将幸 (東亜大学) 下園博信	
HP 担当	福岡大学	

編集後記

九州スポーツ心理学会会報「健康と競技の心理 (Psychology of Health & Sport)」第 23 号をお届けいたします。ある日の会話の中で、ふと友人が「最近の子どもたちは、情報もすぐに入ってしまうし、ググれば答えもすぐにわかって便利なんだけどね。深く考えることもないし、情報に疑問をもたないし、なんのために学んでいるのかわからなくなりそう。」とつぶやきました (*ググる=検索エンジン Google を使ってネット上の情報を検索すること)。そうだなと頷きつつも、あれ? 子たちだけではないよなあとも思いました。吉田松陰の有名な語録の一つに、「学は人たる所以を学ぶなり」があります。この言葉には、人は学びを通じて、人としての生き方を一生かけて追求していくことという意味が込められているそうです。知識の提供だけでは、グーグル先生と同じことになってしまいます。学生をはじめ、関わっていく子どもたちには、考えるきっかけ作り、判断と行動を支え、学び続けられる機会と環境を与えられる教育者・指導者でありたい。便利さに飲み込まれず、私自身も共に学び続けなければならないと実感しております。

さて、第 32 回大会が鹿児島天文館ビジョンホールにて開催されます。大会テーマは「子どもの運動指導の再考」です。たくさんの皆さまの御参加を心からお待ちしております。最後になりましたが、お忙しい中、快く本ニュースレターの御執筆を頂きました先生および大学院生の皆様、誠にありがとうございました。皆様方に厚く御礼、申し上げますとともに、今後ともよろしくお願い致します。

編集担当 今村律子



平成 31 年 3 月 発行
九州スポーツ心理学会会報第 23 号
「健康と競技の心理」
Psychology of Health & Sport
広報・編集担当
今村律子 山崎将幸 下園博信

*当記載すべての無断転載・引用等は固くお断りします